

「1」

「ああ……」

「こんにちは、式珠司です」

「直接お会いするのははじめてですね……よろしく願います」

「不思議な気持ちです。今日が来るのが楽しみで、時間を作ってはあなたの資料を眺めていたので……まるで遠足に行く前の子供見たいですね、お恥ずかしいですわ」

「ありがとうございます」

「ふふ、資料に紅茶派と書いてあったので注文しておきました」

「それで……単刀直入に言わせていただきますと、わたしはあなたとすぐにでも結婚したいと考えております。条件は申し分ない……という言い方は失礼ですね。わたしの理想の結婚相手があなたでした。……あなたもそう思ってくれると嬉しいんですが……いかが、だったでしょうか？」

「本当ですか！？ 嬉しい……うふふ……それでは、このまま話を詰めていきたいのですが……わたし、ひとつだけ確認したいことがあるんです……セックスの相性を……事前に確かめたくって」

「ふふふ、そんなに驚かないで下さい。わたしとあなたの＼マッチング結果は高スコア……家柄、学歴、性格の相性は運命的なほど合致しています。ですが、性行為は実際に見ないと分からないでしょう？ 夫婦生活において、夜の営みは避けて通れませんし……」

「ご理解ありがとうございます。それで質問、というか確認なのですが……あなたは女性にリードされたい、いじめられたい、責められたいと考えるマゾヒストなんですか？」

「あけすけな質問で驚いたかしら？ けれど、ここははっきりと、資料に印刷された文字だけではなく、あなたの言葉で知りたくて……答えていただけますか？」

「ふふ、恥ずかしそうな顔を浮かべながらも答えてくれるんですね……嬉しい……」

「あなたの希望条件は把握しています。妻として、責任を持ってあなたの望むプレイに応えてあげます。心から愛してあげるし……マゾのあなたが気持ちよくなりすぎて頭がおかしくなっちゃうぐらい……わたしの言葉とおちんちんで可愛がってあげる。だってわたしたち、夫婦、になるんですものね」

「はぁっ……わたしの言葉に期待して、わたしに何をされるのか想像してる顔……かわいい……はぁっ……」

「んんっ……失礼、独り言ですわ。それで……この顔見せが終わったらすぐセックス、というのも難しいでしょう？ あなたの予定の都合と、身体と心の準備ができたらご連絡していただけますかしら？」

「ふふ、それでは、今日はこのくらいでお開きにしましょうか。来て下さってありがとうございます。次にお会いできるの、楽しみにしておりますわ」

「どなた？」

「はい、少々お待ちになって」

／可能ならドア越しのように加工ここまで

「ふふ、お久しぶりです。と、言ってもまだ二週間も経っていませんのね……。今日はお仕事お休みだったんですか？」

「ええ、この間お会いした時と比べると汗の匂いがしなかったので……。ご自宅でシャワーを浴びてきたのかしら、と推測したまでです。ああ、そんな、謝らないで下さい。く、臭かったわけではないんですよ？　わたし、少し人より鼻が効くもので……」

「どれぐらい鼻がいいか、ですか？　ええと、すれ違った方が付けている香水がどのメーカーか分かる程度、かしら……。？　もちろん自分が嗅いだことのある商品に限りますけど……。すごいですか？　ふふ、友達には地味な特技と言われるので褒めていただけて嬉しいです」

「さ……。こちらへ……」

「こちらのベッドに腰掛けていただけます？」

「隣、失礼しますね」

「身体の相性を確かめるには……。そうですね……。まず裸で触れ合うことですね。わたしの服、脱がせていただけます？」

「手を上げればよろしいの？　ふふ、ばんざーい」

「あっ……」

「ふふ、今日はあなたに会うから、気合を入れた下着を着てきたんです。あなたの趣味に合えば嬉しいんですが……。どうでしょうか？」

「よかったぁ……。次は立てばいいのね？」

「ふふ……こんなに近いと……あなたがわたしの腰に手をかけた時に、心臓の音が大きくなったのバレていそうですね……これからもっと見せたり、見せられたりするのにわたし、これぐらいでドキドキしちゃって……お恥ずかしいです……」

「ん……」

「あなたも緊張して、ドキドキしていらっしやるんですか？ ふふ、それならお揃いですね」

「次はストッキングですけど……どういう姿勢になればいいかしら？ ベッドの縁に手をつけて、お尻をあなたに突き出せばよろしいの？ わかりました」

「んっ……」

「はあっ……あん……」

「今度は私があなたを脱がせる番ですね。失礼します」

「こうやってシャツのボタンをひとつひとつ外していくの、もどかしいですけど、ゆっくりとあなたに触れていくようで、同時に期待で胸がときめいてしまいますね」

「ズボンは……あとにしましょうね」

「はあ……」

「ブラジャーのホック、外していただけますか……？」

「んっ……」

「外すのは私がしますね。んしょっと……」

「ふふ……おっぱい、丸見えになってしまいましたね。わたしのおっぱい、大きいでしょう？ ちょっと失礼しますね」

「いきなりブラをあなたの顔に押し付けてごめんなさい。でも、これで私のおっぱいがどれぐらいのサイズか実感できましたでしょう？ あなたのお顔よりも少しだけですが、私のおっぱいの方が大きいんですよ？」

「このまま目を閉じて、大きく深呼吸してみてください。ブラカップの中に染み付いた私の汗の匂いを感じられると思いますよ」

「あら……一回だけでいいと思ったのにそんなに何回も深呼吸なさるなんて……私のニオイ、気に入っていただけました？」

「ふふ、嬉しい……それに……」

「その言葉、本当なようですね」

「まだほとんど何もしていないのに、ズボンが膨らんでいますよ。わたしの身体に興奮しているんですね？ でも、わたしも同じです……」

「はぁ……」

「わたしもこの通り、ショーツがはち切れそうぐらい、あなたに興奮しておちんぼを硬くしてしまってます……いいえ、あなたよりも興奮しているかも分かりません。ちょっとそこに座ったままでいて下さいますか？」

「はぁっ……わたしのおちんぼ……あなたにドキドキして、興奮して勃起してしまってるおちんぼ……見て下さい」

「んっ……はぁっ……」

「あぁっ、ごめんなさい、私のおちんぼが大きいせいで、あなたの顔に当たってしまいました。痛くはありませんか？」

「大丈夫ならよかった……改めてご覧下さい、これがわたしのふたなりおちんぼです。結婚したら何度も何度もあなたのナカに入れるおちんぼ、あなたを抱くおちんぼなんですから、ご挨拶して下さい。簡単に触るだけでもいいんですよ」

「んもう、ご挨拶、して下さい！」

「んっ……こんな感じでおちんぼに触って、硬さや大きさを感じてみて下さい」

「はぁっ……状態としては半勃起、程度でしょうか……でも、あなたが遠慮しながらも丁寧

に触ってくれるから……はあ、自分で触ってるのとは全然違う優しいタッチにおちんぼ興奮してしまつて、ちよつとずつ硬く、大きくなりながら上向きに反り返ってきてるの、分かりますか……?」

「んんっ……あなたに触られているおちんぼ気持ちいい……でもお……ふんわりしたタッチだけだと物足りなくなってきました……はあっ……申し訳ないんですけれど……私のおちんぼを握つて、シコシコと手コキをしてくれますか……? 触るだけじゃなくて、私がどんな風に気持ちよくなつて射精するのか、あなたに見て貰いたいです……」

「はあっ、んっ、ふ、はあ……んっ、んんっ、はあ、ん……」

「はあっ、あなたの、壊れものを扱うみたいに優しく握り込んで、おっかなびっくりって感じでゆるやかにシコシコするの……ただどしいはずの手コキなのにすごく気持ちいい……はあっ……いいよお……あなたにおちんぼ扱かれるの、気持ちいい……」

「んっ、はあ……あっ、んんっ……はあ、はあ……ふう……んっ、んっ、んっ……だめ……腰、勝手に動いちゃう……はあっ……はあっ……わたし、お尻揺らして……もっと気持ちよくなろうとしちゃつてる……」

「ね……もっと激しく動かして……おちんぼぎゅって握り込んで、わたしが痛がるぐらい激しくシコシコしてわたしにはしたくない声を出させて下さい……はあっ……わたし、もう、気持ちよくなりたくて切ないんです……はあっ、あ、んんう、はあっ……」

「はあっ、はあ、んんっ、ふ……はあっ、はあっ、あ、んんっ……くうっ……さっきよりは、激しくなりましたけど……まだ足りない……はあっ……あの……お手本をしますの……手、一度止めていただけますか?」

「はあっ……では……私がふたなりおちんぼはどうシコシコするかのお手本をお見せしますね。まずは先端からおもらしみたいに溢れ出てる先走りを指に絡めてローション代わりにして……」

「カウパー液で手全体を濡らしつつ、おちんぼにも絡ませて全体の滑りをよくしてから、んっ……おちんぼを両手で握り込んで……」

「はあっ、あ、んんっ、はあっ、はあ……あっ、ああ、んんっ、ふ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……ああんっ……あなたにフル勃起おちんぼ見せつけながらガニ股センズリしちゃってるう……恥ずかしいのに気持ちいいのお……はあっ、あんっ、あ、ふう、んんっ！ はあっ、あ、んんっ……あっあ、はあっ」

「はあっ……わたし、裏筋を刺激するように指に力を入れてえ……はあっ……シコシコしながら亀頭を撫でるのが好きで……はあっ……よく見てえ……ふうっ……んっ……おおっ……！ おちんぼにあなたの視線が絡みついてくるう……はあっ……目で愛撫されてるみたいな気持ちになってしまいますわ……はあっ、あ、んんっ……ふ、ああん……！」

「はあっ……はあっ……あなたに見られながらセンズリするの気持ち良すぎて……イくまですっつとシコシコしていたいと思っつてしまいましたが……はあっ……それじゃあ意味がありませんものね……ふううっ……」

「はあっ……さあ……あなたが熱い視線で見っていた、オチンポをいじるわたしの手の動き、もう覚えましたわね？ あなたの記憶の中でわたしはどうオチンポを刺激していましたか？ やっつて見て下さい」

「はあっ……そう……いいわ……そうやって手指にカウパーを絡めてえ……ん、はあっ……あなたの手汗とわたしのチンポ臭が絡み合っつて……すうううっ……はああっ……脳にびりびり来ます……」

「はあっ……んっ、く、はあっ……んんっ、はあっ、あっ、んっ、はあ、くっ……すごい……さっきとぜんぜん違う……わたしの手付き、とてもよく観察してくれていたのね……はあっ……わたしに奉仕するためにじっくり見ていたの？ それとも……んふ……今夜のオカズにするつもりだったのかしら……？」

「はあっ、はあっ、はああっ……ん、はあ、あ、んんっ……ふうっ、あ、いいっ、はあ、あっ、ああ……！ いいわあ……あなたのお陰でおちんぼとっても気持ちいいの……はあっ……思わず腰揺れちゃう……はあっ……はっ……んっ、く、う……！」

「んっ……はあっ……もつと扱いて……はあっ……あ、んんんっ……！ 上手ですよ……ふうっ、んっんっ……はあっ……！ ああっ……ね、わたしのキンタマ触ってくださいます？」

「はあっ……あ、んんっ……キンタマ下から掬い上げてたゆんたゆんされるの好き……はあっ……あん……わたしのキンタマ……ずっしりしてるの分かるかしら……？　あなたにシコシコされて気持ちよくなったチンポから……ここに溜まってる精液全部出しちゃいますからね……はあっ……あ、んんっ、く、はあっ……！」

「ふううっ……あんっ……あ……！　はあっ……あんっ……！　はあっ、出ちゃう……せーえき、出るうっ……！　はあっ……お願い……手をわたしのオチンポの先に当てて……あなたの手をティッシュ代わりに……精液受け止めて頂戴……！」

「はあっ、あんっ！　あ、はあっ、あっあ、はあっ、あ、いく、いく……あ、あっ……！」

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……はあっ、あ……んんっ……はあっ……」

「はあっ……ありがとうございます。とても気持ちいい手コキでしたよ。次は……いっぱい射精して精液まみれになった汚れおちんちんを舐めてもらえるかしら？　はあっ……」

「ね、見て……あなたにお掃除フェラされると思っただけで、わたしのおちんぼ興奮して、射精したばかりなのにもう半勃ちになってしまいました……はあっ……恥ずかしながら、ふたなりのおちんぼは男性より持久力が高くて、こんな風にすぐに元気になってしまいうんです」

「わたしのために……おちんぼ掃除、できますよね？」

「んっ……ペろっ、ペろっ、と飴を舐めるみたいにされるのも気持ちいいですが……わたしにして欲しいのはフェラチオ……ふふ、あなたのお口全体を使って、わたしのおちんぼを掃除して下さいな？」

「はあっ……んっ……そう……歯を唇で包んで、おちんぼを傷つけないようにしてくれてるのね……嬉しい……その気遣いだけでイってしまいそう……はあっ……そう……上手よ……喉奥で亀頭締め付けて……はあっ……唇をすぼめて……自分のお口をオナホだと思って動いてみて……はあっ、あぁっ……素敵……あなたのおフェラチオとっても気持ちいいわ……はあっ……あ、あっあ、はあっ、んんっ！」

「ふううっ……ううっ……はあっ、あ、んあっ……はあっ、あんっ、はあっ、あっあ、んんっ、はあっ、あっ、あっあっあっ、あんっ！　あぁっ、あんっ、はあっ、あっあ、んんっ、はあっ、あっあっ、あぁんっ！」



「ふううっ……いいよお……あなたがおちんぼぺろするの気持ちいいからあ……さつき出したばかりなのにキンタマまた重くなってきたるうう……射精欲求刺激されて……はああっ……精液どぴゅどぴゅしたい……はあっ……あ、んんっ、く、はあっ……！」

「ああっ、ん、はあっ、あっあ、いいっ、いいよおっ……！ はあ、あんっ、あ、っく……んっ……はあっ、あっ、あんっ！ はあっ、あっ、あっ、あんっ……ふーっ……んっ、あっ、あ、あっあ、あんっ、はあっ、あっ、んんっ、あっ、ひっ、あっ、あ！ はあっ、あ、んんっ！」

「ああっ……だめえ……いっちゃう、いっちゃうよお……もっとあなたのフェラチオ味わたいのに……あなたの喉まんこ擦ってる先っぽがくばくば言って射精準備しちゃってるう……はあっ、はあっ、はあっ……でも止めて欲しくないの……もっとちゅうちゅううぺろぺろして……はあっ……わたしのこと射精させてえ……！」

「はあっ、はあっ、はあっ、あっ、いっく、おちんぼおっ！ おちんぼ我慢できない……！ はあっ、あなたのお口にできたてザーメン注ぎ込ませてえ……！ はあっ、あ、んんっ、くうっ、は、あっあ、あ、はあ、あ、んんっ……！ あ、ああっ！」

「はーっ……出てる……おちんぼドクドクって音立てて、あなたのお口に精液注いでるう……はあっ……吐き出してはダメ、ごっくんしてえ……わたしの精液の味、あなたの内臓にまで覚えさせて……」

「んっ……」

「はあっ……はあっ……本当にごっくんしてくれた？ お口を開いて確認させて……？」

「ふふ、本当に飲んでくれたんですね、嬉しい……わたしをイかせてくれた上に精液飲み込んで、とても偉いわ……はあっ……」

「よろしかったら、このタオルで手と口を拭いて下さい」

「はあ、それにしてもとっても気持ちよかった……あなたのおちんぼ奉仕、わたしと相性がいいみたいね……はあっ……本当に幸せ……」

「次はわたしの番ですね。あなたのおちんぼにご奉仕……くすっ、違うわね……。あなたのおちんぼをいじめさせてね」

「わたしのおちんぼを知っていた次は……あなたのおちんぼについて知りたいです。今度はあなたが立って、わたしにおちんぼを見せていただけますか？」

「あら、まだ何もしないのに、ズボンがばつつんばつつんのテントを作って……」

「もしかして、勃起、しちゃってるのかしら？ うふふ、手コキ奉仕とフェラチオ奉仕しただけで興奮しておちんぼ硬くしちゃうなんて……どんなことを考えていたの？ わたしのおちんぼに犯されたいって考えながらシコシコしてくれていたのかしら……それとも、奉仕してるって事実だけで気持ちよくなっちゃったの？」

「顔を赤くしてもじもじして……凶星みたいね？ ふふふ、本当に変態のマゾオスさんなんですわ……」

「ズボン脱がしてあげますね……今度は下着越しのおちんぼがどうなってるか知りたいです……」

「ふふ、下着にシミを作っちゃって……触られる前から先走りのお汁を垂らしちゃうぐらいのすけべマゾのおちんぼは、一体どんな匂いがするのかしら……？」

「すううううっ……はああ……すーっ……んはあっ……すううっ……ん……」

「こうやって股間に鼻を押し当てて深呼吸するだけで……発情したオスの匂いが肺の奥まで流れ込んできて……ぞくぞくしちゃう。もっとわたしのことを興奮させて……すーっ……はーっ……すううっ……はあっ……」

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……わたくしの鼻におちんぼの先が当たるから……ドキドキしちゃう……んふふ、わたしを誘惑するなんて……はあむっ」

「腰を引いて逃げちゃダメですよ。直に触る前に下着越しにおちんぼぺろさせてください。ぺろ、ちゅううっ、ちゅっ、れえろっ……はあっ……ちゅっ、ぺろぺろれるる……」

「うふふ、下着の生地に唾液が染み込んでじっとり濡れて……おちんぼの形がくつきりとしてきましたね……ふふふ、あなたのおちんぼの先端は、こんな形をしていらっしやるのね。早く見てみたいけど、もう少し我慢をして……ちゅっ、ぺろ、れる、ちゅ、ちゅば、ちゅっちゅ、れえろ、れる、ちゅば、ちゅうっ」

「欲しがってる視線を向けしないで下さい。我慢しているわたしも辛いんですよ？ちゅば、ちゅっちゅ、れる、ちゅば、ちゅっちゅ、ちゅうっ、くちゅくちゅ、ちゅっ」

「うふふ……おちんぼが切なさうに下着の中で暴れ回ってる……気持ちよくなりたいって言ってるみたい……えっちなんですね……ぺえろ、はむ、ちゅっ、はむはむ」

「あらあら、まだまだ序の口なのに腰をかくつかせちゃって……そんなにこらえ性がないと、これからどうなるか分かりませんか？ うふふっ。でも今日は特別に、焦らすのはこれぐらいにしておきましょうか。それではあなたのおちんぼ拝見いたしますね……」

「あら……うふふ、下着越しのシルエットで薄々察してはいましたけど……私と比べると随分……ふふ、かわいらしいんですね。おちんぼと言うより……おちんちんかしら」

「あなたのかわいいかわいいおちんちんは、一体どんな味なのかしら？ 確かめさせて下さいね」

「ちゅっ、ちゅば、ちゅっ、ちゅっちゅ……ふふ、鈴口にキスするとおちんちんがぴくん、ぴくんって跳ねて……陸に上がった小魚みたいです。ちゅ、ちゅうっ……」

「キスの次は……れえろ、れる、ちゅっ、れええろっ、れるっ。ふふっ、舐め上げようとしたらすぐに舐め終わってしまいました。何度もペロを往復させられますね。ぺろっ、れる、れる、れる、れろ、れえええろっ、れる、ちゅばちゅば、ねえろ、れえろっ」

「あらあら、おもしろしたみたいにカウパーをだらだら染み出しちゃって、まだ挨拶程度のおちんぼキスしかしてないじゃないですか……もうちょっと形を味わわせてちょうだいなちゅっ、ぺえろ、ちゅばちゅっ、ちゅば、ちゅううっ、じゅる、ちゅば、ちゅばちゅば……はあっ、ぺろぺろするたびにあなたの匂いが濃くなってくる……」

「はあっ……わたし、もっとあなたに我慢させようと思ったのに……ふふ、はしたない女でごめんなさいね……あなたが欲しがってるだろう濃厚なフェラチオ、させていただくわ」

「あー……むっ！　じゅるっ、じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！　じゅるるっ、じゅば、ちゅば、じゅるるっ、れる、じゅば、じゅるる、れえろ、れるれる、じゅば、じゅるるっ！　じゅっぽじゅっぷ、んふう、ちゅば」

「はあっ……ほっぺを窄めて、頭を振っておちんぼにむしゃぶりつく、わたしの本気のフェラ、いかがですか……？　なんて、答えを聞くまでもないト口顔……かわいい……もっとそのお顔を見たいから、射精は我慢してね？」

「ちゅっ、ぺろ、ちゅっ、ちゅば、ちゅうっ、ちゅっちゅ、ぺろ、れえろ、れろ、ちゅっば、ちゅば、れえろ、れろ、ええろ、ちゅばちゅば、ちゅっ、ちゅうっ、ちゅば、ちゅっちゅ、れろ、れえろ、ちゅうっ、ちゅば、ちゅっちゅっ、ぺろっ……はあっ……じゅっぷじゅっぷじゅっぷ、れえろ、ねえろ、ちゅっ、ちゅうっ、じゅぶっ、じゅぶぶっ！」

「んっふ……！んっ……じゅる、んっく、んっ……！　はあっ……」

「ふふふ……あーん」

「どうですか？　簡単に全部飲み込めてしまいましたよ？　さっきあなたの手に出したわたしの精液と比べてサラッとしたテクスチャーで……明らかに薄かったです。男性なのに、ふたなり女性よりも弱々しいザーメンなんですね。やっぱり、わたしがあなたのマゾケツに種付けして、孕ませるのが正解みたいね」

「わたしの言葉に興奮しているの？　ふふ、まだ結婚も決まっていない相手に種付けされるのを想像して気持ちよくなっちゃってるのね……かわいい……でも、ふふ、あなたが乗り気になってくれているのは……嬉しい、ですよ……」

「さて、おちんちんを確かめ合ったところで次のステップに移りたいのですが……あなたは、ふたなりと男性の結婚生活で必要なことが何か理解されていて？」

「はい、その通り。殿方のお尻がふたなりおちんぼとのセックスに耐えられるか……です。ですので、あなたのお尻の具合を確かめたいのですが……いいかしら？」

「ありがとうございます。それじゃあ、わたしは準備をしますので……あなたはベッドの上で四つん這いになって下さい」

「嫌がるどころか嬉しそうな顔でベッドに上がるのね、本当にイヤらしい人ですこと。でも、わたしも積極的な方の方が嬉しいです。それでは、準備を致しますね」

「まずはこのローションをたあぷりと指に絡めて……」

「あらあら、音を立てないようにしても、指が滑っちゃって、くちゆくちゅ、くちゆくちゅってエッチな音を立ててしまうわ……」

「これぐらいヌルヌルしてたらあなたのお尻の粘膜を痛めずに済むかしら……これから指を挿入しますね」

「あら……あなたに苦痛を与えたらどうしようと思ってたのに……ふふつ、気持ちよさそうな息を吐きながら指ちんぽを受け入れて……」

「指はまだ一本にしたけど、付け根まで入ったから抜き差ししますね」

「ゆー……つくり抜いて……ゆーつくり挿してえ……ローションとお尻の粘膜が擦れて、ちゅぽ、ちゅぽっていう音が鳴ってる……えっちなね……」

「くちゆくちゅ……くちゆくちゅ……素質があるのかしら？ もう一本……いいえ、二本入れられそうね」

「不安にならなくても大丈夫よ。わたしを信じて？」

「ん……さすがに少し感触が窮屈だけど平気そうね？ この調子で……」

「抜いてー……挿してー……ふふ、もしかして自分でアナルいじったことがあるのかしら？ 軽く手マンしているだけなのに、もうほぐれて……入口がひくひくって震えてますよ」

「ふう……んっ……はぁ……ゆるくなってきた代わりに、腸壁が指に吸い付いて、動かすのが一苦勞になってきたわ……指だけでこんなに貪欲にむしゃぶりついていたら、おちんぼハメる時は一体どうなっちゃうのかしら……？」

「もうっ、そんなにきゅんきゅん締めてきてはダメ。これから指で円を描くようにぐるぐるゝって動かして、あなたのお尻を拡張していかなきゃいけないんだから……」

「んっ、んっ、んっ……ぐるぐる、ぐるぐる……お尻の中がびくびく震えて抵抗して、それなのに少しずつナカが拡張されてきてる……ふふっ、今わたしの指がどっちに向いてるかわかる？ その通り、上ですね。次は？ 正解、右……時計回りにぐるぐるゝ、次は上から左に逆時計回りにぐるゝっと。うふふ、粘膜が驚いて痙攣しちゃってる。怖がらなくて大丈夫ですよ？ 少し我慢すれば気持ち良くなりますからね、よしよし、いい子いい子」

「ふう、お尻の中に挿れた指がバラバラに動かせるぐらいになりましたね。次はもう少し奥を責めて……前立腺からあなたを気持ち良くしてあげましょうか。男の人が気持ち良くなっちゃうスイッチ……えーと、あなたの前立腺はどこかしら？ ここじゃないし、ここでもないし……」

「うふふ、ここにあるのね。えいっ、えいっ、お尻の中からおちんぼ刺激されて気持ち良くなっちゃえっ」

「イヤ、じゃないでしょう？ ぐいぐいって押されて刺激されるたびにお尻振りながら声出してるじゃない。嘘つきにはこうやって、中指で思いっきりぐりぐりゝってお置ききちゃいますよ？ まぁ……ヨダレまで垂らして……お置ききにはならなかったみたいですね？ それなら……気持ち良すぎて苦しいってぐらい責めてあげる」

「ぐいっ、ぐいっ、ぐりぐりゝ！ うふふ、やめてと言ってるのにおちんぼバキバキに張り詰めちゃって……さっき射精したのにキンタマもずっしり重くなってる……エッチなことが大好きなんですネ」

「もう指ちゃんぽだけじゃ物足りないでしょう？　今度はもっと太いオモチャを使ってお尻を拡張して……おまんこになるように開発してあげます」

「ちょっとこっちを見て？」

「このアナルパール……見ての通り、一番太い部分は私の指を束にしたより太いでしょう？　でも先端は細いし、表面はつるつるしてるから、慣れてきたお尻に入れるにはちょうどいいんじゃないかしら？」

「じゃあ……挿れますね……」

「まずは一粒目のパール……ん……ちょっとお尻の穴が抵抗してしまっていますね。すんなり入るように、手コキで気持ち良くしてあげますから、無駄な力を抜いて、アナルを開発されることを考えてね」

「おちんぼシコシコされながらお尻の入り口をちゅぽちゅぽぐされるのはいかが？　あら……可愛い声を出して……気に入ってくれているし、お尻もパールを喜んで咥え込めるようになりましたね。えらいえらい」

「それじゃあ、もう一つ増やしますね……ふふ、よくがんばりましたね、少しずつ球が大きくなっていくんです。この調子でどんどんお尻の穴を拡げて、わたしのためのおまんこにしていきましょうね」

「もう一つ……二つ……次からはあなたが数えてみて？　お尻からの快感でいつ増えるかわかるでしょう？　ふふ……いいわよ……うん……敏感なお尻ですね……もう少して全部入りますからね……」

「はい、アナルパールが根元まで挿入されました。じゃあ今度はゆっ……くり引き抜いてみましょうか。んっ……ふふ、お尻が咥え込んでなかなか離しませんね。お尻を奥まで責められるのハマっちゃったのかしら？　いい子だからちょっと力を抜いてね……キンタマすりすりってさすってあげますから……」

「んっしょ……うんしょ……ふふ、ずるずるって言いながらアナルパールが抜けてきました……ん、いまあなたのお尻に入っているのは先端の小さい球だけです。どんな気持ちですか？　そうよね……気持ちいいわよね……はぁ……息を荒げながら、甘くとろけた声を上げてるんだもの……正直に答えられたあなたにはご褒美に奥まで挿れてあげる。んっ……きつ……んっ、んっ……」

「ふふ、奥まで気持ちよくなるとそんな声を出すのね……お尻のナカもきゅっと締まって……わたしの手であなただが喘いでくれて嬉しいわ。もっと一緒に愉しみたくなくなってしまします」

「これで終わりじゃないから、お射精は我慢してね。できる？　……んふふ、苦しうだけががんばれ、がんばれっ。私がいいって言うまでザーメン出すの我慢できたら……もおーつと気持ちよくしてあげるから、ね？」

「いい子ね。私も責め甲斐があるし……あなたをいじめるの、とっても楽しいわ。がんばれっ、がんばれっ」

「くちゅくちゅ、くちゅくちゅって喘いでますね。はぁ……可愛くて美味しそうなお尻まんこになってきて……ハメるが楽しみだわ……」

「ん……射精を我慢するのも限界みたいね。じゃあアナルパールは抜いてしまっ……と……ん、っしょ……」

「次は……こちらのデイルドをお尻に入れてみましょうか」

「これをわたしのおちんぼだと思って啜え込んで……お尻の穴をセックスできるサイズにしちゃいましょうね」

「あらあら、お尻を揺らして……そんなに欲しいの？」

「素直でよろしい。ではわたしも、これを自分のおちんぼだと思って、あなたとのセックスを想像しながらデイルドを挿入してあげますね……だからあなたも、これから挿入されるのはデイルドではなくおちんぼ、だと思って下さいね」

「んっ……はぁ……あ、んんっ……あなたのお尻に……おちんぼ入ってくう……はあっ……あん……おちんぼ気持ちいいよ……んっ、んっ……！」



「はあっ……これでおちんぼ全部入りましたよ……はあっ……あなたのおちんぼ扱いあげながら、お尻ずぼずぼ犯してあげますからね……」

「ああっ、あんっ、はあっ、あっ、ああん、あっあっ、はあっ、ああっ、あっあ、あっ、あ、ふうっ、ふあ、あっあん、はあっ、あんっ……はあっ、あっ、あん、はあっ、あっあ、やばっ、はあっ、あっ、はあっ、あっあ、ああん、はっ、あっ！」

「はあっ……お尻からすごいやらしい音出てる……あなたのお尻がおちんぼ咥えこみながら締め付けてご奉仕してる音……おちんぼも硬くなって射精準備してる……はあっ……あなたはお尻犯されながら興奮する変態なんですよのね……あなたが犯されてる想像がしやすいように、もう少しお手伝いしますからねえ……」

「んんっ……ん、はあっ……はあっ、あんっ、ああっ！ あっ、ああん、はあっ、あっあ、んんっ、はあっ、あっあ、んんっ……くうっ……あっ、あんっ、ああっ、あっあっ、あんっ、はあ、んんっ、ふ、んんっ、あっ、んあっあっ、あ、はあっ……！」

「ほらほら、早くイっちゃいなさいマゾの変態さん。メスイキしながらオス射精して頭の中ぐちゃぐちゃになるぐらい気持ちよくなりなさい……はあっ……イク時は……声を我慢せず、情けないぐらいのイキ声を私に聞かせて下さいね……はあっ……」

「うふふっ、おちんぼびくびくしてきたあ……マゾ射精してうっすい精液びゅっびゅって無駄撃ちしちゃって。あなたのイクところ、早く見たいなあ……」

「はあっ……イっちゃったのね……わたしにいじめられて即イキしちゃったんだ……」

「おしっこみたいに薄い精液びゅーって出たねおちんぼびくびく震わせながら撒き散らしちゃったねえ……ふふっ、マゾザーメン出すの上手ね……それに……おちんぼだけじゃなくて全身をびくびくって震わせながらケツイキもできて……とっても偉いわ」

「ふたなりとつがいになれる立派なマゾオスになれてえらいえらい……ふふっ……きよとんとしてるけど、気持ち良すぎて何が起きてるのか分かってないの？ かーわいいっ」

「かわいいから……もっとしたくなってきちゃった……もう少しお付き合いしていただけるかしら？」

「ねえ見て……」

「あなたのえっちなところを見たから、わたしのおちんぼガチガチにフル勃起しちゃったの……はあ……触ってみてくれるかしら？」

「分かるでしょう？ このまま何もしないなんて耐えきれない……だからあ、あなたにはおちんぼを興奮させた責任をとって欲しいし……まだ付き合っていないのに、セックスしたくなっちゃってるの……どうすればいいかしら……？」

「そうよ、あなたとセックスしたいの……もちろんあなたが嫌なら我慢するけれど……」

「ふふ、おちんぼ見ながらヨダレ垂らして……あなたもセックスがしたいのかしら？」

「つまりわたしたち両思いなのね……せっかくだから、アナルとおちんぼの相性も今日のうちに確認してしまおうかしら？」

「決まりね。ベッドに仰向けになって待っていて」

「ええと、ゴムは確か……」

「あったあ。お試しセックスだもの、きちんとゴムはつけないとね……」

「じゃあ、ゴムありセックスしましょうね……」

「うふふ……」

「入れるわよ……」

「んっ……うおっ……お……はあっ……あ、んんっ……!」

「はあっ……すごい……わたしのおちんぼが根本まで入るなんて……これは運命ね……はあっ……じゃあ……次は……わたしがいくまであなたを犯してあげる……」

「はあっ……ん……く……はあっ……んんっ……はあっ……ふ……んんっ……ふうっ、あ、はあっ……あん、あ、はあっ……あ、ふうっ……！」

「すごい……！ お尻の粘膜がわたしのちんぽに絡みついて……射精促してくれてるう……はあっ……あんっ……はあっ……こんなに気持ちいいセックス初めて……はあっ……相性良すぎ……やっぱりあなたとわたしは運命の相手なのね……はあっ……好き……大好き……心だけじゃなくて……おちんぽもあなたに恋しちゃってるの……」

「あっ、ああっ、あん、はあ、んんっ、はあ、んっ、あ、んんっ、あっあ、あ、あっん、あっ、あっあ……はあっ、あっあっ、ああん、はっ、ああっ、あっん、ふ……んんっ……はあっ、あっ、ああん……あん、はあ、んんっ、はあ、んっ！」

「あんっ、あ、はあっ……すごいよお……腰振るの止まらない……！ お試しセックスなのに、はあっ、あなたのお尻まんこガン掘りしちゃうてるのお……ふうっ、ん、はあっ、あっあ、はあっ……こんなに激しくしたら……すぐイっちゃようお……もっとじっくりあなたとしたいのに……はあっ、あ、んんっ……」

「はあっ、あ、あなたもイきたいの……はあっ、それなら……一緒にイきましょう……？ あなたがイった時にぎゅううっってお尻締め付けて、わたしのことをイかせてちょうだい……はあっ、ああっ……」

「くっう……あ、はあっ……んあ……はあはあ、あ、んんっ……あんっ、はあっ……！ だめえ……我慢、あ。んうっ、はあ、あっあ……だめえ、も、あ、イっちゃ、はあっ、ああっ！ はあっ、はあっ、はあ、あ、ああっ！」

「おおおっ……おあ……はあっ……イった時の締め付けすごい……ゴムの中にどっぶどっぶ射精して……はあっ、あ、んんっ……！」

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

「ふふっ……はあっ……見て……わたしのおちんぽに引っかかてるゴム……たっぷり精液を注がれて、風船みたいに膨らんじゃってるわ……」

「ああ……っ」

「はあっ……こんなにたっぷり射精したのに、おちんぼまだ満足できてないの。見て……まだ振り返るぐらい勃起してるのよ……」

「あなたもまだセックスしたような顔をしてるから、もう一度したいんだけど……このホテル、備え付けのゴムがひとつしかなかったの……」

「ええっ？ もっとセックスしたい、と言ってくれるのは嬉しいけど、会うのが二回目のお相手とナマでセックスするのは躊躇いが……ふふ、でも、あなたが結婚相手だったら、何も気にせずに生ハメして、本気のセックスを味わえるんだけど……」

「朝もおはようの中出しでしょう？ お仕事から帰ったらおかえりなさいのセックスをして……夜は気絶するまでハメ倒されるの。もちろんお休みの日は朝から晩まで犯してあげる」

「わたしの言葉に興奮してる……やっぱ生ハメしたいのね……」

「悪い話じゃないでしょう？ わたしと結婚して、わたしに人生を委ねるだけで、好きなだけふたなりのデカチンに中出しされて気持ちよくなれるのよ？ 悪い話じゃないと思うんだけど……どうかしら？ わたしのおちんぼで、おかしくなるぐらいの快感を味わってみたい？」

「わたしと結婚して、身体も心もいっぱい愛されてくれるかしら？」

「それなら……誓いの言葉を言って。今から私が言うことを、心から望んで口にするの。……『弐珠司の可愛い可愛いお嫁さんになって一生愛し、愛され続けます』と言いなさい」

「うん……うん……舌がもつれるぐらい必死になって言ってくれて嬉しい……はあ……あなたが私のお嫁さんになってくれる……ずっと……あなたが私のものに……だめ、もう我慢できない……」

「じゃあ今から生ハメして……遺伝子混ぜ混ぜして子供を作る予行練習をしましょうね……その前に、私のお嫁さんに大好きの気持ちを込めてキスしてあげる……」

「じゅる、ちゅば、ちゅうっちゅ、れろ、じゅるる、ちゅば、ちゅうつ、ちゅっちゅ、れろ、じゅるる、ちゅば、ちゅっちゅう、ちゅうつ……ふはあ……もっと……ちゅつ、じゅるる、ちゅうつ、ちゅっちゅ……はあっ……」

「それじゃあ……生ちんぼがあなたのおまんこに入りますからね……」

「んんっ……はあっ……あ……さっきいったばかりだから、お尻のナカきつい……それに、わたし……とっても興奮してるから……入れただけで精液出ちゃいそう……」

「我慢……我慢……ふたりで気持ちよくななきゃ……わたしたち、愛しあってるんだから……はあっ……」

「はあっ……全部入った……これからあなたのことハメ潰して、どうやって孕ませられるかを教えてあげるわね……」

「はあっ、はあっ、はああっ……ん、はあ、あ、んんっ……ふうっ、あ、いいっ、はあ、あっ、ああ……！　いいよ……大好き……！　んおっ……はあっ、あんっ、はあっはあっ、あ、んんっ！　はあっ、あ、んんっ……あ、はあっ、あっあ、んんっ！」

「はあっ……あなたのアナルが壊れないように……くうっ……慣れるまで腰、動かさないようにしようと思ったのに……ダメえ、こんなに気持ちいいおまんこのナカにおちんぼ突っ込んで我慢するの無理……！」

「んおっ、おおっ、おおっ……おおっ、おっお、おうっ、おっ……んおおっ……はあっ、あんっ、く、ふうっ、はあっ、あっあ、はあっ、おっおっ、お、うおおっ……っひ、あ、あーっ、あ、ああっ、あああっ！　らめえ、腰動かすの止めらんない……！　はあっ、あ、んお、あへあ、あ、んんっ！」

「はあっ、しゅきいっ！　あなたのおまんこに生ちんぼハメするの大好きになっちゃったあ！　はあっ、んお、はあっ、いまわたし絶対アヘアへした恥ずかしいエロ顔になってりゅ……はあっ……あなたとセックスできて嬉しすぎて顔ゆるゆるになりゅ……！」

「ふうっ……あへえ、あっん、くうっ……あ、あっ！　はあん、あっあ、うあ、あっあ、んんっ！　ふうっ……あーっ……あ、んあ、おおっ！」

「はあっ、あんっ、ああっ……あなたと出会えなかったら、はあっ、絶対こんな気持ちにならなかった……わたしがほしかった運命の人……はあっ……もう絶対に離さない……どんな手を使っても……はあっ……絶対に……あなたは永遠にわたしのものなんだから……！！」

「ね……あなたもわたしのことをぎゅーってして……おちんぼとアナルだけじゃなくて、もっと身体全体でくっつきあいいたいのお……！」

「はあっ……あなたの体温が肌から伝わってくる……幸せ……はあっ……このままふたりで溶け合っちゃいたいくらい……はあっ……あーっ……おちんぼもぎもちいい……んおおっ……熱くてぬるぬるのお尻でぐちよぐちよに締め付けられてえ……溶けちゃいそうだよお……」

「はーっ……はああっ、はーっ……おうっ！好きな人とする子作りぎもちいいお……はあっ、ね……わたしのこと愛してるって言ってえ……はあっ……あんっ……あなたからの愛の言葉、おちんぼにぎゅんぎゅん来る……はあっ……わたしも、あなたのこと愛してる……だから……はあっ……もっと一緒に……ふたりで気持ちよくなろうね……」

「ちゅっ、じゅるっ、ちゅううっ、んっく、ちゅっ、ちゅっ、ちゅうっ、じゅるっ、ちゅっ、ちゅうっ、ちゅば、じゅる、ちゅっちゅ、ちゅうっ、じゅる、じゅるる、ちゅば、じゅるっ、じゅぶっ、じゅるっ！」

「はあっ、んへえあ！はあっ……いいよお……ふたりでするガチハメセックス気持ちいいよおっ……わたしい、あなたが気持ちよくなるようにいっぱいおまんこかき混ぜるからあ……いっぱい気持ちよくなってメスイキしてえ……！そしたらわたし、とっても嬉しいから……」

「んはあっ！あっ、あっあ、うおおっ！あっんく、おっお、はあっ、あっあ、んんっ、くっ、あっはあ、あ、んあ、あっあ、あ、んんっ、うお、おおっ！はあっ、あ、んんっ！」

「はあっ……メスイキしてくれたの……？お尻まんこの奥、ぎゅって締まった……はあっ……あんっ、でも、あなたのおちんぼまだ硬いわね……はあっ……」

「はあっ……わたし、もうイきそうだから……あなたも……ね？シコシコしてあげるから……一緒にイって……？射精しながらわたしのザーメン、お尻まんこの奥で受け止めてえっ……」

「はあっ、あっ、はあっ、あんっ、あっ、あっ、あっあっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、はあっ、んおううっ！はあっ、はあっ……ああっ！あっあっ、はあっ、ああん、はあっ、あっ、ああん！あっ、ああん、あっあっ、はあっ、ああん、はあっ、あっ、あっ、ああん、はあっ、あっ、んんっ、ふう、んう、あふうっ、あ、はあっ！」

「はあっ、あっ、いく、いくいくいくっ！ はあっ、あ、生出し、するっ……あっく、あ、ああっ、あ、あ、あーっ！」

「ふーっ……ふーっ……おおっ……すっご、まだ出るっ……はあっ……ああっ……わたし  
のザーメンの量だけであなたのお腹膨らんじやいそう……はあっ……あっ……んんっ……  
はあっ……」

「ちゅっ……んちゅ、ちゅば、ちゅうっ、じゅるっ、ちゅば、ちゅうっ、ちゅっちゅ、じゅ  
る、ちゅうっ、ちゅばちゅば、じゅるっ」

「はあっ……気持ちも、身体も深く繋がれたわね……これからはずーっとふたり一緒に生  
きていきましょうね……わたしの大事なあなた……誰よりも愛してるわ……ちゅっ」

「ふんふふーん♪」

「あら？ まだ寝ていなかったの？ いっぱいセックスして疲れたんじゃない？」

「男の人って体力がすごいよね。私は……さすがに眠いわね……」

「実は……寝る前に少し相談があるんだけど、いいかしら？」

「あのね……どんな結婚式にしたい？ あなたとの結婚式だから、盛大にやるべきだと思うんだけど……」

「ふふっ、そうね。ふたりでゆっくり考えていきましようか……」

「わたしね、本当に嬉しいの……だから気持ちが急いてしまって……ごめんなさいね」

「ふふふっ、ありがとう……これからよろしくね。大好きな……かわいいかわいいわたしのお嫁さん……ちゅっ」